

## 元越山に登った独歩の帰り道

武 田 剛

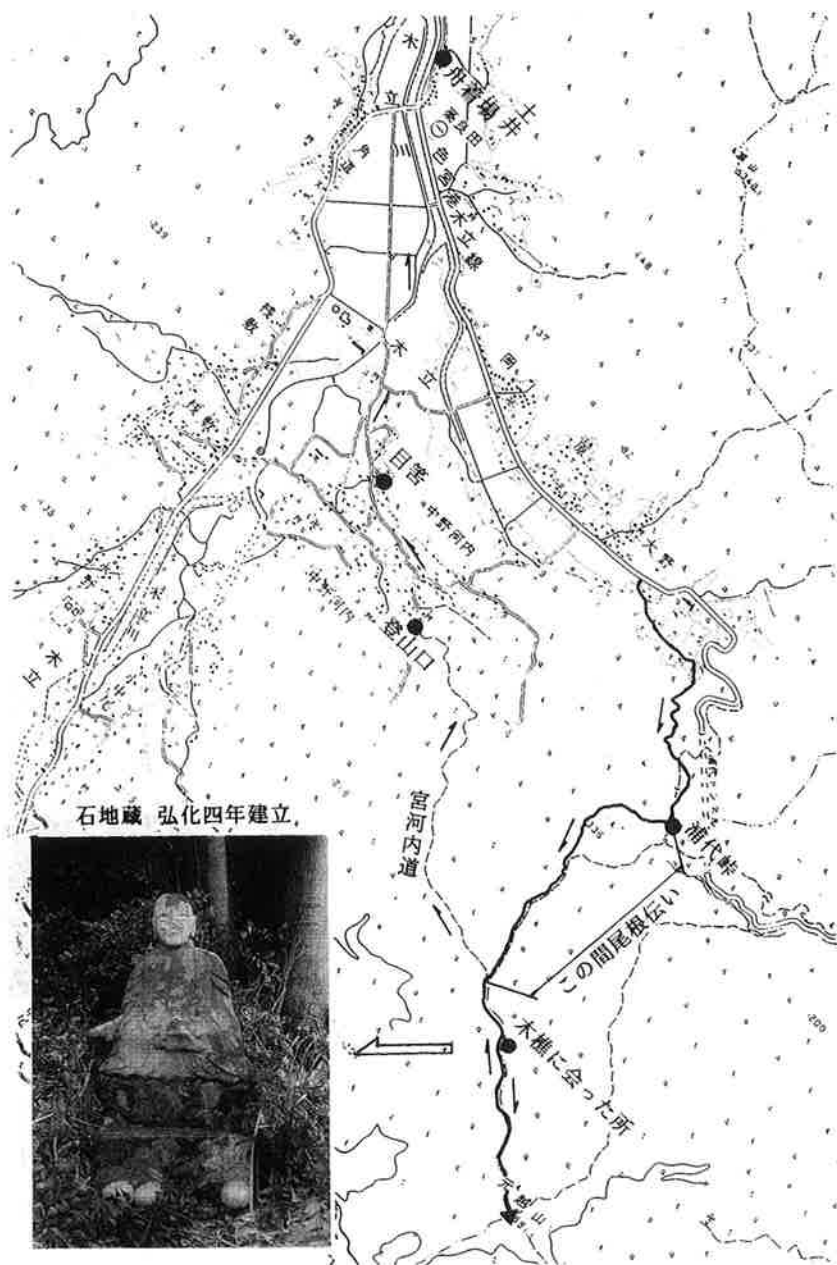
(会員・佐伯市木立)

本誌を編集される林寅喜さんが突然わが家に来られて「国木田独歩の『元越山に登る記』を読むと、登った道はわかるが降りて帰った道の事は書いていない。何か昔の人から聞いた心当りはありませんか。」と尋ねられた。林さんは敗戦直後、木立村役場に勤めて先年佐伯市役所を下水道課長で退職するまで几帳面で有能な土木技師であった。それが停年退職するとたちまち郷土史家に変身した。これは氏を知る人にとってまさに驚きである。しかし史家になっても几帳面さは相変わらず、独歩の帰途不明は捨てて置けないのである。そして「登る記」や小野茂樹さんの「独歩と佐伯」の抜粋や、うちの曾祖父がかつぎ上げた元越地蔵の写真などのコピーを持参された几帳面さ、熱心さには脱帽した。早速独歩の「登る記」を読んだ。独歩を読むのは四十年振りの様な気がする。

戦後すぐ独歩をさがして読んだ。読んだのには少なからず理由があった。

私の家の前に一本の柿の老木がある。在来種の木立名産「コネリ柿」である。この木は私が少年の頃と今ほとんど姿は変わらない。あまり大きい木ではないが樹齡はかなりの様だ。それでも毎年子供の握りコブシ位の砂糖の様に甘い実を枝が折れる程つけてくれる。この木に、兄が中学生、私が、小学生の時一緒に登って柿を食べていたら兄が「この木にや、国木田独歩が登って柿を食うたんぢや」と云った。私は国木田独歩と云う名前のひびきが物々しかったので一ぺんで覚えた。たぶん剣豪か何かと思っただけであろう。そして長じて中学生の時独歩を知り「なる程」と思つて「武蔵野」など読んでみたがあの戦中だったので特別の感慨は残らなかった。

戦後、たしか佐伯東小学校の講堂で文芸春秋社の文化講演会があり、講師の評論家中島健蔵氏が「文士、小説家は澤山居るが文豪と呼ばれるのはほんの何人かだ。独歩は文豪と呼ばれ、その優れた文学には佐伯の自然の影響が大きい。私は今日、池船橋から番匠川の上流の山に夕陽が沈むのを見て感動の涙が頬を伝わった。ああこの



石地藏 弘化四年建立



自然が文豪独歩を育てたのだ」と云う話をされた。私は「とすると独歩は夏目漱石に匹敵する人だなあ」と認識を改め、畏敬の念で又独歩を読み始めた。その時独歩作品はあらかた読んだと思つたがとんでもない、肝心のわが村木立の「元越山に登る記」さえ読んでなかつたのだ。もしも林さんがコピーを持って来てくれなかつたら読まないままあの世に行つて独歩の前で肩身のせまい思いをするところだった。

「登る記」を読んでみると、日本文と漢文の中間の様な文章でむつかしい漢字が多いがみなルビがあるので読みやすい。読み出すと自然に節がつく様な美文名文である。これを書いた時独歩は二十二才、この若さでこの名文、さすが文豪になる人は違う。名文のため木立がまるで中国の桂林の様な景色の良いところになつてゐる。

独歩が佐伯に来たのは丁度百年程前、日清戦争の始まる前の年だ。佐伯に来ると東の方に「大山蟠屈する元越山」の「もし朝日いまだ昇らざる時、窓を開きて望めば、白雲山谷に湧き、断雲その山腹を掠むるを見る。夕陽すでに没し、蒼然たる暮色、村落、市街を包むの時、その頂は夕陽に輝き、山麓には紫嵐の湛ふるを見るなり」

を見て登りたくてたまらなくなり、十一月五日「碧空拭うがごとき」秋晴れの朝、船頭町のにぎやかな浜丁から渡し舟に乗つて木立に向う。船の客は七、八人でほとんど行商人、中に「柿売りの農女二人、満面笑みを含みて売働のよかりしを喜び少しも覆うところなきを感じせしめたりき」とある。木立の柿売りのおばやん二人が値が良かったので素直にニコニコしている有様が目に見える様で読んで胸がじんとしてくる。そして独歩達は行商人の冗談や実話に笑いころげたり感心したりして木立の舟着き場に着く。ここは木立の土井、今は国道三八八号線が通つて昔日の面影は無いが渡し舟を業とした家二軒は今も健在である。そして独歩達は晩秋の木立平野を木立川に沿つてさかのぼる。途中の景色や人物の描写はまるでミレーか菅一郎先生の絵の様だ。がしかし、独歩達は若さの故かメチャクチャで誰でも初めて登る山は麓で「どこから登つたらいいか」くらい尋ねて登るのが常識だがそんなめんどうな事はせず、どんどん浦代峠のつべんの茶店まで登つて茶店の人に登り道を尋ねている。「ここからは道が無いので登れん、下に降りて登り直せ」と云われたのに「強情負けん気に駆られて」猪の如く

羊齒しだボソの中に頭を突き込んで何べんも転ころげながら「帽子、衣服、手足の嫌いやいなく樹枝のため騒さわぎ破やぶられ」て登のぼって行き、猪の足跡にたまがり護身用にナイフを振りかざして登のぼって行く。途中、北の方に豊後富士つまり別府の鶴見岳を見て元気を出し早はや々と握り飯を食べて馬力を出して元越山頂に至る。そこで太平洋や日向、豊後水道、四国の佐田岬、久住阿蘇の九州連山のとどろくを見て感動した有様は「一種云いあたわざる感に打たれ、ほとんど涕てい泣なきせんばかりなりき」とある。近頃元越に登る澤山の人を見るが「泣き出さんばかりに感激した」人は居ゐない様だ。だから佐伯にはたった一人も文豪が育そたず、あちこち居るのは酒豪ばかり。私なども元越山一帯が共の共有林だから遠足登山などの生やさしいものではなく、冬ふゆの朝暗あやいうちに登りついて植林のための火入れをしたり、重い松苗をかつぎ上げて植林をしたそのつらさで涙なみだが出でそうになつた事はあるが、景色を見ただけでは「涕泣」に至らなかつた。

独歩達は山頂で一時間程過すごして帰途についた。帰り道は「大道坦々一里余にして山麓に達した」とある。大道と云つても人一人通るのがやつとの山道だが登りがイ



2合目附近から見た木立側

バラの道だったから大道の様にあつたのだろう。

ところがこの降りついた麓の様子は一宇も書いてなく、すぐ渡し場に行つて乗つて帰つて風呂に入つて寝たとある。こんなこゝに帰りの記述を手抜きされると後世の人は迷惑する。だから林さんの様にわざわざ木立までカブに乗つて調べに来る人も出でくるのだ。

なぜ独歩は麓の事を書かなかつた

のか、勿論降りた所は中野河内の迫の的場まうらであろう。

大道坦々とした下り道は今も昔もこしかない。現在の元越登山口である。本誌に以前書いたが、ここは毛利藩が木立で狩をした時弓の競射をしたところでの的場と呼ばれている。的場から迫道・目管めはす道わが家のそばを通過して土井で渡しに乗ったのに間違いない。

そこで疑問に思うのはこの十一月五日頃と云えば木立の至る所にあるコネリ柿の一番熟れた頃である。佐伯に来て一秋に八十個、一説によれば三百個も柿を食べたという猛烈柿好きの独歩が、それも登る途中で早々と握り飯を食べて腹ペコの独歩が、その上山頂から「渡し」まで二里、八キロを歩かねばならない独歩が、赤く熟れた「コネリ柿」に目がいかぬ筈がない。それが櫛はやら桑の事は書いていられるけれども柿の木の事は一字も無い。舟の中の柿売りのおばやんの事は書いていのに熟れた柿の事はわざとさけている様だ。これはどうもおかしい。そこで私の兄が云った「独歩が登って柿を食べた」と云う言葉が真実味を帯びてくる。私は戦後独歩を読んでその偉大さを知ると、兄の云った事は「本当かなあ、兄の作り話ぢゃあないか。」と思いはじめていた。それで昭和五

十七年頃だったか、

この木には独歩も登り柿食うたと

われをかつぎて戦死せし兄

と云う歌をよんだ。私をだました兄信治郎をなつかしんだ歌である。これを朝日歌壇に出したら運良く入選した。しかし、どうも今回「登る記」を読んでもみると、兄の云った事は「ほんとぢゃあ」と思う気になってきた。

私はこう想像した。帰り道へトへトペコペコになった独歩は柿が食べたいが持主のわからん柿を取って食べるわけにはいかない。それでわが家のそばの木を見て家人に「一つ下さい」と所望した。「登って食わんせ」と云われて這い登りちぎっては食べ、ちぎっては食べた。そして「私は鶴谷学館の国木田独歩です」と名乗り礼を云ったに違いない。それがわが家に云い伝えられて兄が私に物々しく云ったのだ。だがなぜ独歩は柿を食べたのを書かなかったのか、と云うとなにせ文章の格調があまりにも高いので「柿を貰って腹一杯食べた」と書くのはちょっと書きにくかったのではなからうか。これは二十二才の

青年の高揚した気持を考えると無理もあるまい。とにかく独歩が本当に登って食べたか、それとも兄の作り話か、サイパン島で戦死した兄にはもうたしかめようがない。

大層優しかった兄「ウンなど云わなかつたなあ」とあらためて想うと、兄は私に「独歩はここを通つたんだ」と遺言してくれた様な気がする。

しかし、この様な一文では独歩の帰路特定は無理な様だし、几帳面な林さんが納得してくれるか甚だ心もとない。せめて今生きている柿の木が何か云つてくれるといいのだが。まあ何にしても林さんのお陰で文豪の作品に木立の元越山がこの様に素晴らしく書かれているのを知って泌々独歩を有難く思つた次第である。



### 表紙解説

写真は昨年十二月公開された佐伯藩十一代高泰公の別邸として、文久三年（一八六三）に建築したという天祐館跡地の発掘調査により、出土した基礎群のうちから独立基礎と思われるもの、一つを掲載しましたが佐伯市の市街地は全域が軟弱で地下水位が高いため、基礎強化に力を注いでいたことは今も昔も変わらなかつたようです。

解説 林 寅喜

